

# ビーエー液剤処理によるリンゴ「緋のあづま」の苗木の養成方法

福島県農業総合センター 果樹研究所栽培科

## 1 部門名

果樹 - リンゴ - 品種、生育調節、整枝・せん定

## 2 担当者

畠 良七・岡田初彦・永山宏一

## 3 要旨

本県オリジナル品種リンゴ「緋のあづま」は、頂部優勢性が強く、前年枝先端の数芽からは強い新梢が発生するが、それ以下の芽は伸長せず極短果枝となってしまふ。また、枝幹部は、年数が経過するにつれ新梢発生が極めて少なくなる特性を有する。そこで、若木時代により多くの側枝を確保するため、苗木の主幹延長枝(先端から発生した新梢)にビーエー液剤を散布しその効果を検討した。その結果、苗養成ほ場でそのまま散布したもの、栽培ほ場に移植後に散布したもの、いずれもビーエー液剤処理により副梢の発生が促進され、特に苗養成ほ場の1年生苗木に対する処理では、副梢発生促進効果が高く「緋のあづま」の側枝の確保に有効と判断された。

- (1) 苗養成ほ場のJM2台「緋のあづま」の1年生苗木および栽培ほ場に定植した同年生苗木に切り返しを行い、先端から発生した新梢を残し下部の芽を芽かきして、先端新梢が20cm程度に伸長した頃とその約10日後の2回、ビーエー液剤100倍液を散布した。その結果、苗養成ほ場で処理した区で30～50cmの側枝候補となる長さの副梢発生が多く、せん定後に残った側枝候補枝数も多かった。(表1)。
- (2) 翌年、苗養成ほ場でビーエー液剤処理を行い養成した2年生苗木を栽培ほ場に移植し定植したものと、1年前に栽培ほ場に定植しビーエー液剤処理を行った苗木の両方について、主幹延長枝先端新梢に前年同様ビーエー液剤100倍液を散布した。その結果、後者の副梢発生率が高い傾向が見られたが、無処理区に比較して大きな差ではなかった(表1)。
- (3) 以上の結果から、「緋のあづま」に対するビーエー液剤100倍液の散布は、苗養成ほ場で1年生苗木を移植せずにそのままビーエー液剤処理を行うと副梢発生率が高く、側枝の確保のために有効な手段になると判断された。

表1 ビーエー液剤処理が「緋のあづま」の副梢発生に及ぼす影響

品種	苗木	ビーエー処 理場所		新梢長 (主幹延 長枝) cm	積算副 梢長 cm	平均副 梢長 cm	2006/12/13 副梢の長さ別発生本数					2007/4/3 せん定後副梢数				
		2006	2007				5	5<	15<	30<	50<	total	15<	30<	15<	
							15	30	50	50<	total	30	50	15<		
緋のあづま	JM2	ほ場		95	321	22.6	3.5	2.2	3.9	2.4 <sup>ab</sup>	1.8	13.9	3.0	0.7 <sup>a</sup>	4.8 <sup>b</sup>	
	JM2	苗畑		137	463	28.2	3.4	3.2	2.0	5.3 <sup>b</sup>	2.6	16.6	2.0	3.9 <sup>b</sup>	6.7 <sup>b</sup>	
	JM2	無		119	189	13.5	4.8	2.3	2.2	1.5 <sup>a</sup>	0.8	11.7	1.5	0.2 <sup>a</sup>	1.8 <sup>a</sup>	
					F 値	1.96	2.64	4.46	0.95	0.27	2.75	6.36	0.73	0.78	2.24	40.54
				F 検定	ns	ns	ns	ns	ns	*	ns	ns	ns	ns	**	**

品種	苗木	ビーエー処 理場所		新梢長 (主幹延 長枝) cm	積算副 梢長 cm	平均副 梢長 cm	2007/12/3 副梢の長さ別発生本数						
		2006	2007				5	5<	15<	30<	50<	total	
							15	30	50	50<	total		
緋のあづま	JM2	ほ場	ほ場	168 <sup>b</sup>	1036	61.7 <sup>b</sup>	2.8	2.2	0.7	0.7	10.7	17.0	
	JM2	苗畑	ほ場	150 <sup>a</sup>	638	36.5 <sup>a</sup>	3.6	2.5	1.6	1.8	6.6	16.1	
	JM2	無	無	168 <sup>b</sup>	740	50.7 <sup>ab</sup>	2.5	2.0	1.1	0.3	8.2	14.1	
					F 値	7.50	1.44	5.75	2.19	0.20	1.04	1.67	1.07
				F 検定	*	ns	*	ns	ns	ns	ns	ns	

注1) \*は1%、<sup>a</sup>は5%、<sup>b</sup>は10%水準で有意差あり。TUKEYの多重検定によりアルファベット異符号間で有意差あり。

注2) 2006年は苗木の切り返し後先端の芽以外は芽かきし、先端の芽から伸長した新梢にビーエー液剤100倍液を5/24および6/5の2回背負い噴霧器で散布。2007年は、主幹延長枝となる先端新梢に、2006年4月定植樹(2006年ほ場処理)は5/29、6/8の2回、2007年4月定植樹(2006年苗畑処理)は6/8、6/18の2回、ビーエー液剤100倍液を散布。

## 4 主な参考文献・資料

- (1) 平成18、19年度福島県農業総合センター試験成績概要(2006、2007)